

資源環境経済学特別演習Ⅱ 議事録
2012年度 第11回

報告題名：農業経営の第三者継承の現状と課題

報告者	中村 彰宏	日時	12月20日 午後3時～
所属分野	農業経営経済学	場所	第二講義室
座長	井坂 友美	議事録担当者	中村 彰宏

出席者

長谷部、小山田、米澤、米倉、冬木、高篠、伊藤、スチン、水木、安部、タンボウニ、中村、山口、泉井、黄、今井、渋谷、畠山、ナスン、徐、趙、ユニクロス、劉、王偉、キエイ、井上、志賀、金、伊藤（良）、伊藤（航）

報告要旨

現在、日本農業は農業就業人口の急激な減少や農家の高齢化の進行により、耕作放棄地の増加や担い手不足が大きな問題となっている。これらの問題を解決するための手段の一つとして注目されているのが農業経営の第三者継承である。ここでいう第三者継承は、後継者不在の経営の有形資産やノウハウ・技術といった無形資産を、第三者である継承希望者に受け渡すことで事業を継承することを指しており、法人において従業員の中から後継者を養成する場合や有形資産の移譲のみで無形資産の移譲を伴わない場合は含まない。

後継者がおらず近々経営を中止する意向を持つ農家の経営を、第三者である新規参入希望者が継承することによって、農業経営の持続性と地域の担い手を確保することが可能となる。また、後継者のいない農業経営の農地や農機具といった有形資産だけではなく、営農技術や経営のノウハウといった無形資産を残すことができ、経営を継承する新規参入希望者にとっても、早期の経営安定化を実現する機会となる。

本研究では、先行研究の整理によって第三者継承の特徴や課題を整理し、2008年度より実施されている「経営継承事業」が、その課題を解消できているかを評価すると共に、適切な支援策の提言をすることを研究の目的とする。

また、宮城県角田市において、農業振興公社と第三者継承を考えている農家に対してヒアリング調査を実施し、角田市における継承問題の状況を確認し、移譲希望農家の第三者継承への意向等について調査した。

質疑・応答

渋谷：研究の目的として、経営継承事業の評価をあげているが、ヒアリング対象のIさんの評価はどのようなものか。

中村：まず、今後5年以内に経営を中止する意向があることが事業の要件となっているため、Iさんは現在事業の対象とはなっていない。それに加えて、Iさんの個人的な意見としては、事業の利用によって助成金を受け取ってしまうことで、事業のやり方に合わせなくてはいけないという部分に関して、肯定的ではない部分があるようでした。

安江：第三者継承の成功要因は、併走期間の取り方と、リタイアメントのために事業がうまく使えているかが成功要因となると思うが、今回のヒアリング対象はマッチングの段階にも進んでおらず、そのような点に関しての調査は不可能だと思われるが、どのように研究を進めるつもりか。

中村：その前の段階としての意向や問題意識について調査したいと考えています。

安江：アドバイスだが、第三者継承に関しては、事例研究が進んでおり、成功要因もある程度わかっているので、リタイアメントの部分に重点をおき、農業者が事業を利用してどのようにフェードアウトしていくのかについて、調べるとよいのではないか。

長谷部：経営継承事業は、一件につき200万ほどの予算が投入されることになるようだが、コストベネフィットがたいしてないように思う。比較として、トキの保護の方がコストベネフィットがあるように思うが、経営継承支援に予算を使わず、消える経営は放っておいてもよいのではないか、という意見が出てくるように感じる。役所や研究機関が、予算取りのためにしているような研究のように思える。

中村：条件の悪い土地の小さな経営などに関しては、放っておくということも選択肢としては考えられるが、最近では周囲の地権者から農地を引き受けて借地経営をしている大規模な農家についても後継者が確保できていないという問題が生じており、地域的な損失を防ぐために、このような取り組みが必要だと考えます。

長谷部：そのような利点に関して、もっと明確にし、訴えかける構成にする必要があると思う。後継者が自力で確保できない経営は放っておいて、自然に帰した方が良いと考える意見もあるので、農業の業界内部での必要性だけでなく、積極的な意義について論じる必要がある。

中村：指摘の通り、もう少し整理したいと思います。

高篠：継承がうまくいくためにはマッチングが重要で、農業経験がある方がうまくいきやすいということだが、ヒアリング対象のIさんが想定している人はすでにいるのか。

中村：現時点において、明確な候補はいないが、特に注文はつけていない。ただし、地域にうまくとけこめる人というのが前提条件として考えられている。

長谷部：調査対象は一軒か。

中村：もう一軒考えています。

長谷部：戸別の話となるので、密着取材のような形で、戸別に注目した方がよいのではないかと思う。

泉井：事業の最初の段階として、双方の希望を踏まえてマッチングとなっているが、どの程度まで希望が把握されているのか。失敗理由において、従業員の立場に不満や栽培方法での対立があげられているが、このような点については双方の希望は確認されていないのか。マッチングが機能していないのではないか。

中村：希望については、希望する作目といったような大まかな取り方をしている。また、互いの相性を確認するための体験研修についても省略される場合があり、マッチングの仕組みについては課題が残っているといえる。

井坂：どのように希望を取っているのか。

中村：事業に応募する際に、用紙の中で答えられている。

井坂：応募はインターネットで行うのか。

中村：インターネットからの応募や、関係者からの紹介によって応募できるようになっている。

井坂：家族内での継承システムは崩れつつあるようだが、今後、第三者継承が継承システムとして機能していくという見解か。

中村：農家型、非農家型という分類があるが、どちらかが良いというのではなく、それらが並存しており、選択肢として第三者継承のようなシステムが増えることが望ましいと考えます。今後も基本的な継承システムとしては農家型システムが主流であると考えられ、第三者継承はそれが機能しない場合の選択肢の一つとしての位置づけだと考える。どのような継承システムが望ましいかについては、地域的な戦略などによって意見が分かれると思う。